

まえがき：“教養としての経済学”とは？

✂ 経済学って何だろう？

「経済学ってどんな学問なのだろう」という疑問は、経済学部を進学先に考えている高校生、経済学部に入学者の大学生、そうした生徒や学生をお持ちの親御さんたちに広く抱かれているのかもしれない。高校で進路指導をしている先生方も、経済学につかみ所のなさを感じているのかもしれない。何らかのきっかけで経済学に関心を抱いた社会人の方々も、経済学の取っ付きの悪さを感じているのかもしれない。

一方、毎日のようにテレビニュースや新聞紙上で「経済」に関する話題に接している。円高問題、消費税増税、社会保障改革、欧州金融危機、若年者失業問題など、すべて「経済」問題である。

また、こうした「経済」問題を解決すべく、さまざまな経済政策が打ち出されている。不景気を打開するために金融政策や財政政策が発動され、経済成長を高めるためにさまざまな成長戦略が展開されている。

経済学とは、そうした「経済」を取り扱う学問だと言われても、わかるようでいて、わかりにくいのではないだろうか。ましてや、「教養としての経済学」などと言われると、いっそうわからなくなってしまうであろう。

本書は、読者の方々に、経済学に抱かれている得体の知れなさ、取っ付きの悪さというイメージを払拭してもらうために、一橋大学経済学部の研究者が編んだ本である。私たちは、気軽に手にとってもらえる本、読み物として楽しく読める本、それでいて中身があって、読み応えのある本、読み終えた後に経済学に対する関心がいつ

そう高まるような本を書きたいと思って集まった。

若干、大部^{たいぶ}に思う読者の方もおられるかもしれないが、いやしくも“教養としての経済学”と銘打った書籍が、薄っぺらなものになるはずがない。

✂ 経済学は人類の知恵！

「経済学とは何か」を一言でまとめてしまうと、「人々を豊かにし、人々が幸福を感じられるために必要となってくる人類の知恵」と言えるかもしれない。

先に述べた経済政策も、日本社会で活動する人々を豊かにすることが大きな目的であり、そうして生み出された豊かさが人々の幸福^{いしずえ}の礎になっているかどうかで、経済政策の真価が問われる。

また、経済学を別の視点から見ると、「人間と人間とのつながり、人間と組織との関係をできるだけ良好なものにしながら、それぞれの人間の能力を最大限に引き出すために必要となってくる人類の知恵」とも言える。

人間の能力が存分に発揮されてはじめて、豊かさが生み出され、能力を十分に発揮したと納得できる人間こそ、幸福を実感することができるのでないだろうか。

逆に、人々から豊かさが失われ、人々が幸福を実感できなくなったときに、「経済」に関わる問題は、深刻な社会問題として現れる。第1章は、そうした社会問題を、一国の経済が抱える問題から、身近な問題まで、できるだけ平易に、しかし、本質を外すことなく語っている。具体的には、経済成長、国際貿易、金融危機、経済発展、財政、教育、医療、環境、技術革新といったトピックスを取り扱っている。

ただし、「経済」に向き合うと言っても、何となく「経済」を眺

めているだけでは、豊かさを獲得し、幸せを実感するための知恵など、絞り出すことができない。そこで、第2章では、「経済」を診断し、仮に何らかの問題を見つけ出したときに、処方箋を書くために必要な経済学のさまざまな道具を紹介していく。本パートは、ミクロ経済学、マクロ経済学、ゲーム理論など、もしかするとすでに聞いたことがあるかもしれない経済学のツールへの案内にもなっている。

人々の経済的な営みは、当然ながら、現代の日本だけにあるわけではない。さまざまな地域に、さまざまな時代に、多様な経済的な営みが展開されてきた。第3章では、中国に、ヨーロッパに、あるいは、戦前に、さらには、古代に多様な「経済」の営みを訪れてみたい。

実は、経済学を深く学んでいくには、数学や統計学を習得し、外国語を身につけ、古典をていねいに読む必要がある。そこで、第4章では、数学・統計学習得、外国語学習、古典講読が、なぜ経済学を学ぶ上で必要なのかを説いている。もちろん、いくら必要だと言っても、数学や語学を学ぶことは、経済学を身につけると同様に、あるいは、それ以上に取っつきにくいかもしれない。そこで、数学や言葉の本当の楽しさも、同時に語っていきたい。

✂ 大学で学ぶ経済学の底力

本書を手にとってもらった方の中には、目次を見ていると、時事的な社会事象を取り扱うと言いながら、地味なタイトルばかりが並んでいると思われる人が多いのかもしれない。

本書を編集していた時期にも、消費税増税反対、TPP 反対、原発再稼働反対を掲げて大規模なデモが繰り広げられているというニュースが、毎日のように新聞やテレビで報じられていた。

内外の論壇においても、2000年代半ば以降にアメリカやヨーロッパの経済混乱に端を発した金融危機や、東日本大震災が日本社会にもたらした社会的な混乱は、資本主義経済システム自体の限界が起因であり、現在の政治システムでは有効に対応できないとする論調も根強かった。

そうした差し迫った社会・経済情勢を鑑みると、「“教養としての経済学”とは、ずいぶんと悠長なものだ、暢気なものだ」と批判を受けてしまうのかもしれない。

しかし、新聞やテレビなどのメディアがフォーカスを当てている社会事象には、簡単に賛否を判断することができない、非常に複雑な事情が控えていることが多い。また、メディアが取り扱っていることだけが、あるいは、多くの人々が強い関心を抱いていることだけが、重要な社会問題というわけではない。むしろ、メディアが取り扱っている問題は、多くの人々に気づかれずに存在する数多くの深刻な社会問題を含めれば、非常に小さな部分集合にすぎないと言った方が正確であろう。

本書では、メディアがフォーカスを当てている問題にズームインしながら、その根っ子に困難な経済学的問題が複雑に絡み合っていることを、そして、そこからズームアウトしながら、数多くの社会問題の中で特定の社会問題を相対化する柔軟な視点が重要なことを、平易な言葉で語っていきたい。

✂ 教養とは生き抜く力！

本書のタイトルにある“教養としての経済学”の教養という言葉には、静かで、落ち着いた響きがある。教養のある人と言えば、書斎で分厚い英書を読み、居間でクラシック音楽を鑑賞するような知的たしなみのある人というのが古典的なイメージでないだろうか。

しかし、たとえ教養のある人であっても、常に平穏な環境に居られるわけではない。時には、厳しい環境に直面するであろう。そうしたときに、「過酷な状況で生き抜いていく力」を与えてくれるのも、これまた教養である。

例えば、

- 日本語がまったく通じない異国の環境に放り出されたときに、
そこで生きていくのに必要な言語を操ることができる能力
- 故^{ゆえ}あって牢に入れられたときに胸に潜ませた詩集を鑑賞して精神の均衡を保つことができる能力
- 洪水で時計も計算機も水浸しになったときに、手作業で時刻を知り、計算を行う能力

これらの能力も、すべて教養と呼ぶのにふさわしい。

豊かさが奪われそうな状態や、幸福が実感できない状態こそは、まさに、個人にとって、社会にとって、「経済」の過酷な状況と言えるであろう。そうこう考えてくると、経済学が、平時に知的な喜びとともに、有事に生き抜く力を与えてくれるとき、はじめて経済学は人々の教養の一角を占めることができる。

したがって、“教養としての経済学”は、学ぶ側だけではなく、教える側にも、相当の覚悟が求められている。未来の大人たちには、腕利きの料理人が極上の素材を調理したものを召し上がってもらいたいと思う。私たちは、お子様ランチではなく、フルコースのディナーを満喫してもらうために、それぞれの節を真剣に、しかし、楽しんで執筆してきた。

読書を楽しんでください！

2012年11月

一橋大学経済学部

目 次

まえがき：“教養としての経済学”とは？	i
---------------------------	---

第1章 大きな社会問題，身近な経済問題

1-1 経済の成長と個人の成長	2
	[齊藤 誠]
1-2 賛否両論の TPP	16
● 二分法に陥らずに本質を理解しよう	[石川城太]
1-3 なぜギリシャを日本が助けなければならない？	28
● 国際金融危機とその解決法を探る	[有吉 章]
1-4 どうして貧困なのか？	36
● 制度設計の問題として捉えよう	[奥田英信]
1-5 日本の財政について考える	44
	[佐藤主光]
1-6 「大学生が多すぎる」は本当か？	55
	[川口城太]
1-7 今の医療でいいの？	65
● より時代のニーズにあった医療制度を考えよう	[井伊雅子]
1-8 廃棄物の値段はどう決まる？	74
● 経済学が見落としがちな「モノの世界」	[山下英俊]
1-9 イノベーションをどのように促進するか？	83
	[岡室博之]

第2章 経済学的な発想とは？

2-1	効率とは？ 格差とは？ 衡平とは？	92	[蓼沼 宏一]
2-2	需要と供給の世界	101	
	● ミクロ経済学への誘い		[竹内 幹]
2-3	経済全体を丸ごとつかむ！	109	
	● マクロ経済学への誘い		[塩路悦朗]
2-4	協力の科学としての経済学	118	
	● ゲーム理論への誘い		[宇井貴志]
2-5	社会をデザインする	129	
	● 腎臓移植で考えるマーケットデザイン		[国本 隆]
2-6	為替レートの決まり方	138	
	● 為替で確実に儲ける方法！?		[加納 隆]
2-7	変動するものの価値を評価してみよう	146	
			[石村直之]
2-8	公正かつ自由な競争とは何か？	154	
			[岡田羊祐]
2-9	増税も国債も同じこと？	162	
			[山重慎二]

第3章 歴史の中の経済社会

3-1	歴史の中の私たち	172	
	● グローバルな視座と社会の律動		[大月康弘]
3-2	上海経済の170年	182	
	● 土地制度と都市開発をめぐる		[城山智子]
3-3	経済成長の光と陰	192	
	● 家計簿から見た中国の格差問題		[佐藤 宏]

3-4	電力が変える経済社会の風景	202
	● ベル・エポックのドイツ都市	[森 宜人]
3-5	温泉資源から見た資源利用の歴史	210
		[高柳友彦]
3-6	貨幣鑄造収入で平城京の造営費用を賄った!?	218
		[齊藤 誠]

第4章 プロフェッショナルにとっての経済学

4-1	なぜ、数学を学ぶのか?	226
	● 私たちとその世界を発見するために	[岡田 章]
4-2	なぜ、統計学を学ぶのか?	235
		[黒住英司]
4-3	なぜ、古典を学ぶのか?	
4-3-1	スミス『国富論』とマルクス『資本論』を紐解いてみよう (241)	[石倉雅男]
4-3-2	J. S. ミル：競争と言論の作法を説いた経済学者 (250)	[齊藤 誠]
4-4	道具としての外国語	258
	● 大学4年間で中国語を自らの「力」にしよう	[南 裕子]
4-5	学問への誘い	
4-5-1	英語の楽しみ (266)	[高橋将一]
4-5-2	番外：限定的な英語能力の逆手の取り方 (272)	[齊藤 誠]
4-5-3	統計学の考え方 (276)	[本田敏雄]
4-5-4	数学の楽しみ (282)	[山田裕理]
4-5-5	番外：生き抜くための数学・統計学 (288)	[齊藤 誠]
4-6	政策のプロフェッショナルにとっての経済学	
4-6-1	大学で学んだ経済学を、実務の仕事でどう生かす? (294)	[渡辺智之]

- 4-6-2 政策決定における経済学の貢献：世代会計のケース（298）
 [國枝繁樹]
- 4-6-3 実務の中の経済学，人生の中の経済学（302） [齊藤 誠]

編集後記：とても楽しい編集作業だった！	307
執筆者紹介	311

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

第1章

大きな社会問題，身近な経済問題



この短い講義では、日本社会の全般的な経済活動に対して、日本社会に暮らす一個人として、どのような距離感を持って接したらよいのかを考えてみたい。

もしかすると、皆さんは、日本経済に関わる諸々のことは、個人の生活といっさい関係がないと思っているかもしれない。あるいは、両者に関係があると思っているても、それは、日本経済から個人への一方通行の関係であると何となく感じているかもしれない。個人の生活は日本経済の動向に大きく左右されることがあっても、個々人の振る舞いなどは日本経済の活動規模に比べれば微々たる存在であると漠然と考えているかもしれない。

しかし、この講義では、日本経済の動向と個々人の活動が密接に関連していて、皆さんも含めて、1人ひとりの工夫と努力の積み重ねで日本経済が成り立っていることを語ってみたい。

✂ 経済全体でどれだけ生産し、1人当たりでどれだけ生産しているのだろうか？

日本経済では、日々刻々、さまざまな人たちによってさまざまな生産活動が繰り返されている。例えば、皆さんが肌身離さず持ち歩いている携帯電話も、そうした生産活動の賜物である。「いや、僕の携帯は日本製でなく、韓国製だよ。だから日本経済の生産活動と関係ないよ」と思うかもしれない。しかし、経済学で言う“生産”活動とは、「物を直接生産すること」だけを指しているのではない。外国で作られた製品を日本に輸入し、国内の店々に流通させることも、^{れっき}とした“生産”活動に含まれているのである。

皆さんは、今、私の講義を受けているわけであるが、まさに教育サービスが生産されている現場に立ち会っているのである。ここで言う教育サービスは、私が教室や黒板を使って、皆さんに語りかけ、皆さんと議論することで生み出されている。すなわち、皆さんは教育サービスの消費者（需要者）、私が教育サービスの生産者（供給者）ということになる。ただ、教育現場の面白い面であるが、教師が生徒や学生から学ぶことも少なくないので、消費者と生産者の役割が時々交替することもある。

さて、日本経済で繰り広げられている広義の生産活動から1年間に生み出された価値を貨幣価値で測った総量は、「国内総生産」と呼ばれている。国内総生産は、その英語表現である Gross Domestic Product を略して「GDP」と呼ばれるのが普通なので、以下、国内総生産を GDP と略していく。

それでは、日本経済で2011年の1年間に生み出された総価値はいくらになるのでしょうか。2011年のGDP（正確には、「名目GDP」）はとてつもなく大きい数字であって、468兆2576億円である。億円単位を円単位に換算すると、ゼロが8つ加えられて、

468,257,600,000,000 円

となる。

皆さんは、こんな大きな数字を目の前にすると、目がくらくらしてくるかもしれない。そこで、もう少し身近な数字に書き直してみたい。

どのようにすればよいだろうか。

ここでは、日本経済の生産活動も、1人ひとりの生産活動の積み重ねだと考えて、そうした1人ひとりの貢献をまず計算してみよう。そこで、社会で働いていない生徒や学生、あるいは、すでに引退した高齢者も含めて、老若男女の貢献をすべて等しいとして、“日本

経済の住人” 1人当たり GDP に換算してみる。

2011 年 10 月の日本の人口は、約 1 億 2780 万人、日本経済の GDP をこの人口で割ると、1 人当たり GDP は約 366.4 万円となる。GDP が百兆円単位、人口が億人単位であったから、1 人当たり GDP は百万円単位となって、ずいぶん身近な数字になってきた。とはいっても、皆さんには依然として大きな数字かもしれない。

この 1 人当たり GDP、366.4 万円という数字をさらに身近に解釈してもらうために、GDP は生産の指標だけではなく、所得の指標であることにも言及しておきたい。ただし、ここで言う所得とは、雇われている人たち（労働者）の給与だけでなく、退職者が受け取る年金、会社経営者が受け得る収益や、投資家が受け得る金利や配当など、あらゆる所得が含まれていることに注意してほしい（厳密に言うと、生産指標と所得指標は微妙に異なっているが、ここでは、生産と所得がおおむね一致していると理解しておいてほしい）。

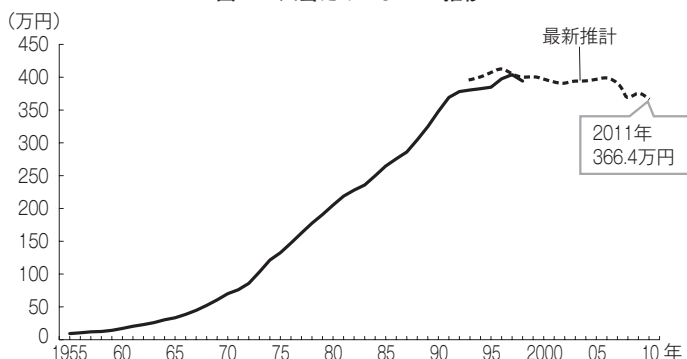
すなわち、2011 年の 1 人当たり GDP が 366.4 万円であるということは、日本経済で 2011 年に活動している人たちが、老若男女押し並べて平均すると 1 人当たり 366.4 万円の所得を稼いでいることになる。

✂ 日本経済の驚異的な成長と最近の停滞

図 1 は、1955 年から 2011 年にかけての 1 人当たり GDP の推移を描いたものである。この図が示しているように、1 人当たり GDP は、1980 年代末まで急激に上昇し、その後は、横ばいか、若干低下気味で推移してきた。

1 人当たり GDP の推移をもう少し詳しく見てみよう。1960 年に 17.1 万円だったものが、70 年に 70.1 万円、80 年に 205.1 万円、90 年に 347.9 万円、2000 年には 401.7 万円、そして、11 年は前述のよ

図1 1人当たりのGDPの推移



うに 366.4 万円と推移してきた。

すなわち、1 人当たり GDP は、1960 年代の 10 年間で 4.1 倍、70 年代は 2.9 倍、80 年代は 1.7 倍と急速に拡大してきたが、90 年代は 16% 増 (1.16 倍) にとどまり、21 世紀の最初の 11 年間に至っては 9% 減少 (0.91 倍) している。

1 人当たり GDP の伸びが顕著であった 1960 年代といっても、皆さんにはどのような時代だったのか見当も付かないと思うが、映画『Always 3 丁目の夕日』が描き出した時代と言え、少しは当時の雰囲気を感じ取ってもらえるかもしれない。

このようにして見てくると、同じ日本社会に住んでいる人であっても、現在、日本経済が停滞している状況に対する見方が世代ごとに大きく異なってくることを容易に推測できるだろう。

経済社会に関心を持ち始めるのが小学生高学年から中学生頃だとすると、現在、30 歳より若い人たちは、1990 年以前の日本経済の拡大期を経験していないので、現在の経済停滞を「従前通りの自然な状態」と見るかもしれない。一方、現在、30 歳を超える人たちは、特に年齢の高い人ほど、日本経済が急激に拡大した時期を体験して

いるだけに、現在の経済停滞を「失速した状態」と捉えるのではないだろうか。

これまでの人生経験が大きく異なっていると、同じ状況であってもまったく違った解釈をするというのは、人間の認識パターンに見られる典型的な側面でもある。

✂ 給与は労働時間に見合っていたのか？

さらに、現在の日本経済の状況を自然な姿と受け取るのか、あるいは、不自然な姿と受け取るのかは、これまでの人生経験だけでなく、それ以外の要因にも左右されるであろう。以下では、「時間給」と「出来高払い」という2つの給与支払い方法から見て、会社や工場で働き給与と所得を受け取るサラリーマンの立場から、どのような状態が自然で、どのような状態が不自然なのかを考えてみたい。

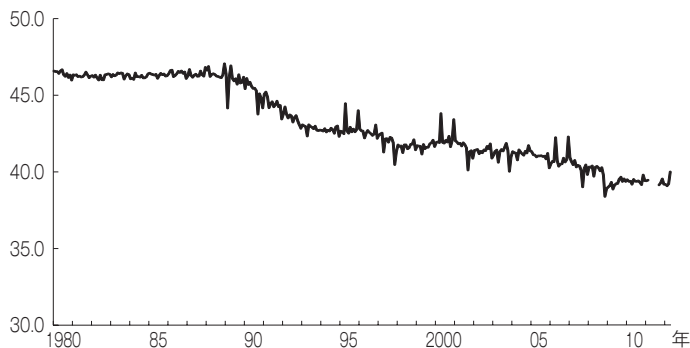
まず初めに時間給のケースとして、「労働時間が長ければ給与が高く、労働時間が短ければ給与が低い」というのは自然な状態であり、逆に、労働時間に見合って給与が支払われなければ不自然な状態と言ってよいだろう。

もし、1990年以降の1人当たりGDPの停滞が労働時間の短縮を伴っていれば、自然な状態と考えられる。実は、1990年代に入って、労働時間が急激に短くなった。

今では、土曜日の休日は広く定着しているが、1980年代までは、サラリーマンは土曜日でも職場に出勤し、午後2時頃まで働いていた。しかし、1988年に労働基準法が改正され、会社や役所は、土日の両日を休日とする週休二日制の導入が順次求められた。1992年には、国家公務員にも週休二日制が導入され、それと前後して民間企業も週休二日制を取り入れた。

図2を見てみよう。労働時間は、1990年代に入って短くなる。

図2 非農林業就業者1人当たり週労働時間数



1980年代までは、週46時間ぐらいであったのが、1990年代になると週42時間まで短くなった。さらに2009年以降は、週40時間を下回るようになる。

皆さんは、もしかすると、週4時間程度の労働時間短縮はたいしたことがないと思うかもしれないが、たとえ半ドン（昼まで働くこと）とはいえ、4時間働くのと、丸一日休むのでは、働いている身からすると、天と地の違いがあった。

したがって、多くのサラリーマンは、労働時間の短縮に見合って給与が伸び悩んだことについて当然の帰結と受け取ったのでないだろうか。会社や役所で働く時間が短くなる代わりに、家族とともに過ごす時間が長くなれば、たとえ給与が減っても充実感を覚えたサラリーマンが多かったのではないだろうか。

✂ 給与は労働の成果に見合っていたのか？

次に、出来高払いのケースとして、「労働の成果（すなわち、出来高）が高ければ給与が高く、労働の成果が低ければ給与も低い」というのは自然な状態であり、逆に、労働の成果に見合って給与が支払

われなければ不自然な状態と言えるだろう。

ここでは、生産水準をもってして、労働の成果（出来高）を測ることにしよう。先ほど、1人当たり GDP（正確には名目 GDP）は、生産指標にも、所得指標にも相当すると言ったが、実は、生産と所得の違いに注意しなければならない。

名目 GDP が所得指標となっている場合、その水準は、日本経済に従事する人々が受け取っている所得の総額を意味している。もちろん、サラリーマンが受け取る給与所得も含まれる。ただし、税金や保険料が給与から控除されるので、実際の手取り所得はそれよりも低くなる。

しかし、名目 GDP が生産指標となっている場合、その水準は、生産数量の影響と、製品価格の影響を注意深く分けて考えなくてはならない。

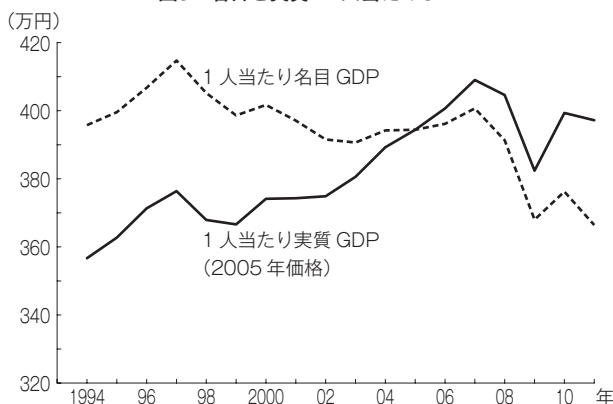
例えば、機械の生産総額が去年 100 億円から今年 110 億円に増加した場合について、2つのケースを考えてみよう。第1のケースでは、1台1億円の機械が去年 100 台、今年 110 台生産されたとする。一方、第2のケースでは、いずれの年も 100 台生産されたが、去年が1台1億円、今年が1億1000万円だったとする。2つのケースをまとめてみると、以下ようになる。

	去年	今年
ケース1	1億円×100台	1億円×110台
ケース2	1億円×100台	1.1億円×100台

第1のケースは、生産水準が正味で 100 台から 110 台へと1割増加している。一方、第2のケースは、正味の生産水準は 100 台で変化していないにもかかわらず、1台当たりの価格が1億円から1億1000万円に1割増加したために生産総額が増加した。

すなわち、名目 GDP によって表される生産総額には、正味の生

図3 名目と実質の1人当たりGDP



産水準の変化だけでなく、製品価格の変化も含まれてしまっている。そこで、新たに「実質 GDP」という概念を用いて、製品価格の変化の影響を取り除いた上で、正味の生産水準の変化だけを表す生産指標を活用してみよう。

図3は、1994年から2011年の期間について、1人当たり名目 GDPと1人当たり実質 GDPの両方をグラフ化したものである。最新の統計から計算した1人当たり実質 GDPの推移は、いずれの年の製品価格も2005年水準と同じであったと想定して実質生産額を算出し、製品価格の影響を取り除き、正味の生産水準の動向のみを表している。一方、1人当たり名目 GDPの推移は、日本経済で活動している人々が受け取る平均所得額を表している。

図3を注意深く観察していくと、1990年代は、名目 GDPの動きと実質 GDPの動きがほぼ一致しており、名目 GDPで表される所得水準は、実質 GDPで表される正味の生産水準に応じて決まっていたと考えられる。しかし、2000年以降、正味の生産水準が拡大しているにもかかわらず、所得が向上しない事態が生まれた。

より詳しく見てみると、2002年から07年にかけて、1人当たり実質GDPは375万円から409万円へと9%増加したのに対し、1人当たり名目GDPは392万円から401万円へと2%強しか増加しなかった。また、2009年から11年にかけて、1人当たり実質GDPは382万円から397万円へと増加したが、1人当たり名目GDPは368万円から366万円へと減少している。

2000年代のこれら2つの期間においては、労働の成果に見合っ
て給与が決められていなかったことになる。すなわち、21世紀最
初の10年間のサラリーマンたちは、一生懸命に働いて生産成果を
あげてきたにもかかわらず、それに見合った待遇を受けていなかっ
た。こうした事態は、サラリーマンたちにとって、決して自然な状
態と映らなかっただろう。

正味の生産水準に応じて給与所得が支払われなかった理由には、
2つの要因がほぼ半々で働いていた。第1に、2000年代になって
諸々の商品の価格が下がり、給与水準もそれにつれて低下してきた
面がある。

第2に、こちらの方がより重要な要因なのであるが、輸出向けの
商品は、海外から輸入する原材料費や燃料費に費用がかさんで製造
コストが上昇したにもかかわらず、アジアや中南米の企業との国際
競争が厳しく輸出製品の単価を引き上げられず、採算割れに陥って
しまった。その結果、輸出向け商品を製造する企業は、生産を拡大
させたにもかかわらず、高い給与を支払うことができなかった。

要するに、激しい国際競争の結果、日本のサラリーマンは、一生
懸命に働いた割に手取りが少なかったのである。日本が今よりも
ずっと貧しかったころの詩人、石川啄木の表現を借りると、豊かそ
うに見える日本で働くサラリーマンの心情は、「働けど働けどわが
暮らし楽にならず」の感覚に近いのかもしれない。

✂ 世界を眺めてみよう

ここまでの議論をまとめてみよう。1990年代に入って伸び悩んだ1人当たり名目GDPの動向は、まず、平均的な労働時間が短縮したことを反映していた。すなわち、これまで土曜日も働いていたのが、土曜日を丸一日、休めるようになった。若干、給与をあきらめても、より多くの休日を享受していると考えれば、サラリーマンが一方的に損をしているとは言えない。

しかし、2000年代に入ると、状況は一転してくる。一生懸命に働いて生産を増やしたのにもかかわらず、給与が労働の成果に見合ってあまり増えなくなった。その背景としては、物価が全般的に低くなったとともに、日本の輸出製品が厳しい国際競争にさらされ、採算割れを起こすようになったからである。輸出製品を製造する企業は、いくら輸出を拡大しても採算がとりづらくなれば、給与を引き上げる余力がなくなってしまう。

「労働の成果に応じて給与が支払われなかった」のは、「労働時間が短くなって給与が減った」と違って、サラリーマンは、働いても報われなかったという意味で一方的に損をしていたことになる。今、日本経済に停滞感が漂っているとすれば、第1の週休二日制の恩恵よりも、第2の一方的な損失の方が人々の経済活動に大きな影響を及ぼしているからなのかもしれない。

以下では、日本経済が成熟期を迎えて、世界的に見ても豊かな国になったということは、豊かさの恩恵で生活にゆとり（例えば、休日の増加）が出てくる一方で、後から追いかけてくる国々から厳しい競争を突きつけられることを避けて通れないということを示してみたい。そうしながら、「豊かになるとはどういうことなのか」を皆さんと一緒に考えてみたい。

まず、事実を見てみよう。国際通貨基金（International Monetary

Fund, IMF と略) と呼ばれる国際機関は、世界中の経済データを集計しているが、181 カ国について1人当たり名目 GDP の国際比較を行っている。表1は、2011年の統計から抜粋したものである。ちなみに日本が承認をしている国家の数は194なので、IMFの統計は世界中の国々をほぼ網羅していることになる。

国際比較をするためには、通貨単位をそろえなければならないが、多くの場合、最も有力な通貨ということで、米ドルが用いられる。前述のように2011年の日本の1人当たり名目 GDP は、366.4 万円であった。2011年の平均的な為替レートは、1ドル当たり約80円なので、366.4万円を80円/ドルで割って、4.6万ドルと換算できる。表1は、アメリカを除くすべての国に対して、同じような換算作業をしているわけである。

2011年の日本のランキングは、181カ国中、18位である。18位というと、あまりさえない順位のように思えるかもしれないが、大国の中では、決して悪い順位でない。1位のルクセンブルク(11.4万ドル)、2位のカタール(9.8万ドル)、3位のノルウェー(9.7万ドル)など、いずれも人口規模の小さな国である。一方、大国に目を移すと、アメリカ(4.8万ドル)が14位、ドイツ(4.4万ドル)が20位、イギリス(3.9万ドル)が22位で、日本の順位は決して見劣りしない。

また、日本の企業と激しい国際競争を繰り広げている国々を見ると、韓国(2.3万ドル)は35位、ロシア(1.3万ドル)は53位、ブラジル(1.3万ドル)は54位、中国(0.54万ドル)は89位、インド(0.14万ドル)は138位で、日本の順位を大きく下回っている。ちなみに、ブラジル(Brazil)、ロシア(Russia)、インド(India)、中国(China)は、その頭文字をとってBRICs(ブリックス)と呼ばれている。最後のsは、4カ国の複数形だから加えられている。

もちろん、1人当たりの名目 GDP には給与所得も含まれるので、

表1 1人当たり名目GDPの国別ランキング(2011年, 単位: 米ドル)

順位	国名	1人当たり 名目GDP (米ドル)	順位	国名	1人当たり 名目GDP (米ドル)
1位	ルクセンブルク	113,533.0	21位	アイスランド	43,088.2
2位	カタール	98,329.5	22位	イギリス	38,592.1
3位	ノルウェー	97,254.6	23位	ニュージーランド	36,648.2
4位	スイス	81,160.6	24位	ブルネイ	36,583.8
5位	アラブ首長国連邦	67,008.0	25位	イタリア	36,266.9
6位	オーストラリア	65,477.0	26位	香港	34,048.9
7位	デンマーク	59,928.1	27位	スペイン	32,360.1
8位	スウェーデン	56,956.3	28位	イスラエル	31,985.7
9位	カナダ	50,435.5	29位	キプロス	30,570.7
10位	オランダ	50,355.5	30位	ギリシャ	27,073.4
11位	オーストリア	49,809.2	31位	スロベニア	24,533.1
12位	フィンランド	49,349.5	32位	オマーン	23,315.5
13位	シンガポール	49,270.9	33位	バハマ	23,175.1
14位	アメリカ	48,386.7	34位	バーレーン	23,132.3
15位	クウェート	47,982.4	35位	韓国	22,777.9
16位	アイルランド	47,512.8	36位	ポルトガル	22,413.5
17位	ベルギー	46,878.4	37位	マルタ	21,028.1
18位	日本	45,920.3	38位	サウジアラビア	20,504.4
19位	フランス	44,008.2	39位	チェコ	20,444.0
20位	ドイツ	43,741.6	40位	台湾	20,100.5

それが高水準の日本で商品を製造するには、労働コストもかさむことになる。こうして見てくると、世界的に見てずいぶんと高い労働コストをかけて製造した日本製品が、はるかに低い労働コストで製造できる外国製品と太刀打ちしていくには、よほど工夫と努力をして優れた性能で競っていかねばならないことは、皆さんにもわかってもらえるのでないだろうか。

「経済的に豊かになる」と聞くと、「豊かになってどんどん楽になる」と思われがちであるが、「豊かになってかえってしんどい」という面も同時に出てくる。

経済的な豊かさは、もちろん、日常生活のゆとりを支えてくれる。1960年代の高度経済成長期は、確かにGDPが急速に成長したが、土曜出勤どころか、日曜出勤も常態化していて、モーレツ（猛烈）サラリーマンでなければ、企業人として生き延びることができなかった。いまや、多くのサラリーマンが、土日を休日として過ごすことができるようになった。家族と有意義な時間を過ごすことも、趣味に没頭することも、自己研鑽することも、週休二日制の普及で可能となった。

一方では、経済的な豊かさは、外から与えられたものでもないし、何もしなくても、そのままずっととどまってくれるものでもない。今の日本経済の豊かさは、私たちの先輩たちが戦後の焼け野原から一生懸命に頑張って築いてきたものであるし、私たち1人ひとりが高いレベルの豊かさを守る努力を怠れば、日本という国は、たちまち二等国、三等国に成り下がってしまうかもしれない。

以上のことを、皆さんの立場にもっと引き寄せて考えてみると、豊かな国に生まれた若者は、社会に出ても、世界的に見て高い給与水準に見合った働きができるように、しっかりと研鑽^{けんさん}を積まなければならないということになるだろう。

1990年代になって週休二日制が普及したのは、日常生活のゆとりを支える豊かさが日本経済にいいよ備わったことを如実に示している。一方、2000年代になって、国際競争に押されて給与が伸び悩んだのは、豊かさを保っていく工夫や努力がまだまだ不足していたことを示唆している。

私の高校時代の担任の先生は、「受験勉強で悩んだときは、夜空を眺めてみろ。きっと、クヨクヨしているのが、あほらしくなるから」と言われて、よく私たちを励ましてくれた。

いま、皆さんには、「受験勉強で悩んだときは、世界を眺めてみ

ろ。きっと、クヨクヨしているのが、あほらしくなるから」と言ってみたい気がする。

「世界を眺める」のは、ニュースや新聞で、あるいは、海外渡航で見聞を広めるだけでなく、表1のようなデータをじっくりと見ることも可能である。そうすると、「世界の中で自分たちがいかに厳しい状況にあるのか」について、今一度自分たちを見つめ直し、そして、より重要なことかもしれないが、「自分たちがいかに恵まれた状況にあるのか」について、改めて世界の同年代の人々に思いを馳せることができるのでないだろうか。

経済の複雑な仕組みを通じて、日本にいる自分と外国にいる他人が深く結びついていることを察することができるのも、経済学を勉強する効用と言えるかもしれない。

▣ **読書案内** こういう場所で自分の著作を紹介するのは、若干気が引けるが、本稿に関心を持った読者には、齊藤誠『競争の作法：いかに働き、投資するか』（ちくま新書、2010年）をぜひとも手にとってほしい。少し難しいところがあるかもしれないが、ほんの少し忍耐を持てば読み通すことができるのでないかと思う。

[齊藤 誠]

編集後記：とても楽しい編集作業だった！

『教養としての経済学』を編集してみようと何となく思った頃から、「経済学の何らかの分野を専門とする研究者が、経済学に対してまったく白地の若者に向かって、経済学を語るということはということなのだろうか」と何度となく自問自答した。

仮に、自分が“ある仏教宗派”の“ある教義上の問題”^{もっぱ}を専らとする学僧だとして、世俗の若者に向かって自らが考えてきたことを語る場合に、“ある教義”の内容を事細かに話しても、空回りするだけであろう。かといって、学僧が^{よもやま}四方山話をしたところで、まったく様にならない。

おそらくは、“ある教義”という微視的な内容に向かうベクトルとはまったく真逆に、「仏教とは」、いや、「そもそも人間にとって宗教とは」という巨視的な内容を、自らが専門としている分野の研鑽にしっかりと基づいて語る必要が生じるのでないだろうか。

自らの専門に基づきながらも、自らの専門から離れつつ語るとは、学僧ばかりでなく、学徒にとっても決して容易なことではない。一方で、自分の専門との間合いをとりつつ、若い人に向けて語るとは、自分自身の研究を振り返るまたとない機会であるし、何と言っても、大変に楽しい知的な作業になる予感があった！

「このようなことをしてみようではないか」と経済学部周囲の同僚に話してみたら、案外にも多くの同僚に賛同してもらった。その結果、私たちの学部を支えている中堅、若手研究者のほとんどの方々に寄稿してもらえたので、蓼沼宏一学部長とも相談して“一橋大学経済学部編”とすることにした。形式的には学部の正規の企画ではないのにもかかわらず、実質的には学部全体が推し進めるプロ

ジェクトになってしまうところは、私たちの学部の良い面なのかもしれない。

最後に、編集者の権限濫用と誹り^{そし}を受けることを覚悟で、この夏、ある高校に講演に行ったときのことを書かせてほしい。その講演では、本書の第1章1-1で書いたようなことを話して、「日本経済や世界経済の動向は決して他人事ではなくて、1人ひとりの営為の積み重ねで全体が成り立っていると考えてみれば、皆さん1人ひとりが日本経済の主演と言える。これからは、そんな気持ちで社会に関わってほしい」と締めくくった。

そのあとの質疑応答の時間に、ある女子生徒から「社会に働きかけるために今何をするべきなのか」という趣旨の質問を受け取った。おそらくは、毎週金曜日、国会議事堂前で原発再稼働反対デモが大々的に繰り広げられていたことが、彼女の質問の背景にあったのであろう。その辺を推し量って「何事も社会勉強、デモに参加してみなさい」とでも言えば、“知識人”として格好が良かったのかもしれない。

しかし、17,18歳の若者が、複雑な利害の絡まる社会問題に対してデモで意思を表明したところで、社会など何も変わらないというのは火を見るより明らかである。そんな格好良い発言は軽々しくできやしない。結局、私は、「今やるべきことを一生懸命やる方が良い。将来、何らかの形で社会に貢献できる強固な土台を作るために、今は、体と頭を徹底的に鍛え、精神力を養い、人間関係の重要性を学ぶのが一番」と答えた。

私は、社会に働きかける個々人の力を心底信じている。しかし、教育者としては、1人ひとりの個人がよほど精進しなければ、社会に貢献できる能力など養うことができない現実も踏まえる必要があ

る。個人の能力が社会において開花するためには、本書で展開しようとしてきた意味での教養が不可欠なのである。

私たち執筆者の間でわざわざ打ち合わせたわけではないが、日頃の大学の講義で語っているコンテンツとスタイルを踏襲しながら、高校生や大学新入生の若い人たちにできるだけ読んでもらえるようなエッセイを書くことを心がけてきたように思う。

通常の大学講義では、テレビでの有識者のコメントと異なって、証拠や論拠をていねいに述べることなしに、(荒々しい言葉で)ある政策的な主張を学生に押し付けることはしない。また、講義をしている自分のことについて、あるいは、自らが所属する大学や学部のことについて自慢話をしたり、逆に非難したりすることもまずはない。いわんや、“デモに参加しよう”とアジテーションをすることもしない。

大学の講義や演習では、通常、4カ月、あるいは、8カ月かけて、議論を通じて学生の知的関心を刺激しつつ、持続的に予習や復習を受講者に求めながら、知的訓練の機会を提供していくという地道な活動が展開されている。しかし、そうした知的訓練を、4年間、時には、5年間にわたって積み重ねてくると、相当の質と量の教養が培われる。本書のエッセイの1つひとつが、大学の講義や演習における知的なプロセスを、雰囲気だけでも、読者に伝えることができれば、本書の出版は、ある程度の目的が達成できたと思う。

「まえがき」で「若い人にフルコースのディナーを」と大見えを切ったのに、味が手前味噌になってはならない。そこで、論文や著作を編集するときと同じように、レフェリー(referee、日本語では査読者と訳されている)と呼ばれる吟味役を以下の先生方をお願いして、

さまざまな観点から多くのコメントを頂いた（敬称略，五十音順）。

経済学部 江夏由樹，加藤博，斯波恒正，武隈愼一，田近栄治，寺西俊一，古沢泰治，前原康宏

商学部 伊藤秀史，楡井誠

経済研究所 青木玲子，小塩隆士，西澤保，深尾京司，森口千晶，吉原直毅

学外 芹澤成弘（大阪大学社会経済研究所），堂目卓生（大阪大学経済学部），西村周三（社会保障・人口問題研究所）

また，日頃から研究をサポートしてくれている鈴木信子さんと山崎幸恵さんには，一般の読者の立場からすべての原稿を読んでもらって意見をいただいた。有斐閣の渡部一樹さんには，企画から編集，そして出版までのすべての段階でお世話になった。ここに深く感謝を申し上げたい。

2012 年 11 月

齊藤 誠

執筆者紹介

(執筆順)

【第1章】

齊藤 誠（さいとう まこと） 担当：1-1, 3-6, 4-3-2, 4-5-2, 4-5-5, 4-6-3
マサチューセッツ工科大学大学院経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：マクロ経済学，金融政策，フィナンシャル・エコノミクス

石川 城太（いしかわ じょうた） 担当：1-2
ウェスタン・オンタリオ大学大学院経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：国際貿易論

有吉 章（ありよし あきら） 担当：1-3
オックスフォード大学大学院経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：国際金融，国際通貨制度，金融規制

奥田 英信（おくだ ひでのぶ） 担当：1-4
ミネソタ大学大学院経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：開発金融論，開発経済学

佐藤 主光（さとう もとひろ） 担当：1-5
クイーンズ大学大学院経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：財政学，地方財政，社会保障

川口 大司（かわぐち だいじ） 担当：1-6
ミシガン州立大学大学院経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：労働経済学，応用計量経済学

井伊 雅子（い い まさこ） 担当：1-7
ウィスコンシン大学マディソン校経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：医療経済学

山下 英俊（やました ひでとし） 担当：1-8
東京大学大学院総合文化研究科博士課程中退，博士（学術）
専攻：資源経済学，廃棄物・リサイクル政策

岡室 博之（おかむろ ひろゆき） 担当：1-9
ボン大学法経済学部経済学科修了（Ph.D.）
専攻：産業組織論，企業経済学

【第2章】

- 蓼沼 宏一（たでぬま こういち） 担当：2-1
ロチェスター大学大学院経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：社会的選択理論，厚生経済学，ゲーム理論
- 竹内 幹（たけうち かん） 担当：2-2
ミシガン大学大学院経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：実験経済学，行動経済学
- 塩路 悦朗（しおじ えつろう） 担当：2-3
イエール大学大学院経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：マクロ経済学
- 宇井 貴志（うい たかし） 担当：2-4
スタンフォード大学大学院経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：ゲーム理論，ミクロ経済学
- 国本 隆（くにもと たかし） 担当：2-5
ブラウン大学大学院経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：ゲーム理論，メカニズムデザイン
- 加納 隆（かのう たかし） 担当：2-6
ブリティッシュ・コロンビア大学大学院経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：マクロ経済学，国際金融論
- 石村 直之（いしむら なおゆき） 担当：2-7
東京大学大学院理学系研究科修士課程修了，博士（数理科学）
専攻：数理ファイナンス，非線形科学
- 岡田 羊祐（おかだ ようすけ） 担当：2-8
東京大学大学院経済学研究科博士課程修了，博士（経済学）
専攻：産業組織論，競争政策
- 山重 慎二（やましげ しんじ） 担当：2-9
ジョンズ・ホプキンス大学大学院経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：公共政策，社会政策

【第3章】

- 大月 康弘（おおつき やすひろ） 担当：3-1
一橋大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得満期退学，博士（経済学）
専攻：経済史，西洋中世史，地域研究

城山 智子（しろやま ともこ） 担当：3-2
ハーバード大学大学院歴史学部博士課程修了（Ph.D.）
専攻：中国経済史，アジア経済史

佐藤 宏（さとう ひろし） 担当：3-3
一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程単位取得満期退学，博士（経済学）
専攻：地域研究，中国経済・社会論

森 宜人（もり たかひと） 担当：3-4
一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了，博士（社会学）
専攻：西洋経済史，都市経済史

高柳 友彦（たかやなぎ ともひこ） 担当：3-5
東京大学大学院経済学研究科博士課程修了，博士（経済学）
専攻：近現代日本経済史

【第4章】

岡田 章（おかだ あきら） 担当：4-1
東京工業大学大学院総合理工学研究科博士課程修了，博士（理学）
専攻：ゲーム理論，理論経済学

黒住 英司（くろずみ えいじ） 担当：4-2
一橋大学大学院経済学研究科博士後期課程修了，博士（経済学）
専攻：計量経済学

石倉 雅男（いしくら まさお） 担当：4-3-1
一橋大学大学院経済学研究科博士課程単位取得満期退学，博士（経済学）
専攻：政治経済学，経済学史

南 裕子（みなみ ゆうこ） 担当：4-4
慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程単位取得満期退学，修士（社会学）
専攻：地域社会学，現代中国研究

高橋 将一（たかはし しょういち） 担当：4-5-1
マサチューセッツ工科大学大学院言語哲学学科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：理論言語学

本田 敏雄（ほんだ としお） 担当：4-5-3
東京大学大学院工学系研究科博士課程修了，博士（工学）
専攻：統計学，計量経済学

- 山田 裕理（やまだ ひろみち） 担当：4-5-4
東京大学大学院理学系研究科博士課程修了，博士（理学）
専攻：代数学，表現論
- 渡辺 智之（わたなべ さとし） 担当：4-6-1
プリンストン大学大学院経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：租税論，法と経済学
- 國枝 繁樹（くにえだ しげき） 担当：4-6-2
ハーバード大学大学院経済学研究科博士課程修了（Ph.D.）
専攻：財政学，マクロ経済学



きょうよう けいざいがく
教養としての経済学
——い む ちから つちか
——生き抜く力を培うために
Economics for the Young

2013年2月25日 初版第1刷発行

編 者 一橋大学経済学部
発 行 者 江 草 貞 治
発 行 所 株式 有 斐 閣 会社

郵便番号 101-0051
東京都千代田区神田神保町2-17
電話 (03)3264-1315(編集)
(03)3265-6811(営業)
<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・萩原印刷株式会社／製本・牧製本印刷株式会社
©2013, The Department of Economics at Hitotsubashi University.
Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-16404-8

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構(電話03-3513-6969, FAX03-3513-6979, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。